

税務経理

●昭和24年10月25日 第3種郵便物認可●発行/毎週2回火・金曜日(但し祝日を除く)●発行所/時事通信社 東京都中央区銀座5丁目15番8号 〒104-8178
◎時事通信社2010

目次

フォーラム

資金会計の国際的展開

複式簿記は、貸借対照表と損益計算書をつくり出すシステムである。少なくとも、この100年間は、そう信じられてきた。それでは、キャッシュフロー計算書も同時につくるような複式簿記システムの設計は可能か。

この命題に日本の資金会計は早くから着目し、相当の成果を上げてきた。欧米では、ようやく2000年を過ぎたころに着目し始めたようだ。今では、国際会計の大舞台で、ひそかにホットなテーマになっているはずである。

名古屋大学大学院教授
佐藤 倫正

その意味では、ポール・ミラー教授が「ストラテジック・ファイナンス」誌(02年2月号)に発表した「直接法のキャッシュフロー報告への近道」という論文は興味深い。この論文が「ファイナンシャル・アナリスト・ジャーナル」(04年3・4月号)のホワイトフィールド・ブルーム教授の「キャッシュフロー計算書…変革のとき」に引用されていくからである。

ミラー論文は、1956年に早大の故染谷恭次郎教授が発表した直接法のキャッシュフロー計算

書をつくり出す「資金会計組織」について言及した後、そこから一足飛びに、わたしが「資金法形式」と呼ぶ調整表を示している。ところが、それらをつなぐ勘定組織の重要な部分は伏せていた。この論文に染谷教授とわたしの名は出てこない。実は、この命題にわたしは85年から取り組んで92年に一応のめどを付け、「會計」(94年1月号)に「資金会計の勘定組織」として発表した。そのときすでに、キャッシュフロー計算書の本体を直接法で表示し、調整表として、「営業活動からのキャッシュフロー」(CFO)からスタートして利益に至る資金法形式を選んでいった。その後、98年夏から翌春までコロラド大学で在外研究をした時、同大学のジョン・トレイシー教授とフィル・シェーン教授に、邦訳だと「三元複式簿記の構造と意義」となる英文のワーキングペーパーを託した。帰国後それを「岡山大学経済学会雑誌」(2000年3月号)に発表しておいた。

何とミラー教授は当時コロラド大学にいたのを知って、後で驚いた。わたしの論文とミラー論文の内容は、偶然の一致をはるかに超えている。わたしと、わたしが引用した染谷教授の名を出さなかったのはなぜなのか。それは重要部分を伏せたことと関係があるのか。何らかの配慮が働いたのであれば感謝する。いずれにせよ、日本の資金会計が国際会計に反映されているように思われる。

